

国士舘大学審査学位論文

「博士学位請求論文の内容の要旨及び審査結果の要旨」

「共和国から国民国家へーサン＝シモンおよびサン＝シモン主義研究ー」

津村 夏央

氏 名 津村 夏央
学位の種類 博士(政治学)
報告番号 乙第50号
学位授与年月日 令和2年3月20日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当
学位論文題目 共和国から国民国家へーサン＝シモンおよびサン＝シモン主義研究ー
論文審査委員 (主査)教授 中金 聡
(副査)教授 安永 勲
(副査)教授 的射場 敬一

博士論文の要旨

題 目 共和国から国民国家へーサン＝シモンおよびサン＝シモン主義研究ー

氏 名 津村 夏央

博士学位請求論文要旨

津村 夏央

論文タイトル：共和国から国民国家へ——サン=シモンおよびサン=シモン主義研究

序 論

本研究の目的は、サン=シモン主義を「ユートピア的社会主義」とみなす従来の解釈に異を唱え、サン=シモンおよびサン=シモン主義者たちの思想と行動をナショナリズムの文脈において整合的に理解することにある。彼らの〈産業社会〉論には政治革命として始まったフランス革命を経済革命として完遂する意図があり、それが結果として〈国民国家〉を生み出すことになったのである。

第 I 部 サン=シモンの思想とそのコンテクスト

第 1 章 ナショナリズムの現在

現代のナショナリズム研究には、〈国民〉の観念をめぐって〈原初／近代〉、〈自然／人工〉、〈リベラル／シヴィック〉の三つの対立軸が存在する。この論争の内容を整理しながら、人工論的ナショナリズムが〈国民化〉の最重要契機として強調する〈産業化〉とサン=シモンの〈産業主義〉思想との関連について考察する。フランス革命が追求した「共和国」の理念は、自由で平等な〈国民〉の観念により伝統的な身分制秩序を解体し、近代国家の「民主化」という歴史的課題を達成したかに見えたが、近代社会が抱える巨大な人口を扶養するという使命は〈産業化〉を待ってはじめて果たされる。各国の〈産業社会〉化を通じて全ヨーロッパ規模の普遍的協同社会を構想した「ユートピア社会主義者」サン=シモンが、ナショナリズムの文脈において今日再評価されるべき理由はそこにある。

第 2 章 ポスト市民革命期の政治思想——サン=シモン主義の歴史的な文脈について

サン=シモンが社会契約論批判と同時期に〈産業社会〉を着想していることから、政治革命に偏頗したフランス革命を経済革命として完遂することがサン=シモン主義の思想的課題であったことを明らかにし、「ユートピア的社会主義」というマルクス=エンゲルスのサン=シモン主義解釈を批判的に検討する。アナトール・フランスの小説『神々は渴く』は、社会契約論に促されて「共和国」を夢想したフランス革命の惨禍を描いている。サン=シモンはフランス革命をホブズとルソーの社会契約論に遡って批判的に検討し、人々の物質的

境遇を改善することなしに公共空間を開放した偏頗な革命がその後続くフランス社会の暴力的な状況を現出させたと診断した。政治革命の影で置き去りにされた経済革命によりフランス革命を完遂するという思想史的課題はマルクス主義と共通するものだが、マルクス主義の「科学的社会主義」が「階級なき社会」の実現を目指したのとは異なり、サン=シモン主義はフランスに伝統的な集産主義と啓蒙合理主義とを糾合することによって、〈産業社会〉こそが歴史の中で実現可能なユートピアであると主張する。

第3章 国民国家の「エコノミー」——サン=シモンの〈産業体制〉論について

サン=シモンの〈産業体制〉の構想に動員された様々な思想的伝統の役割を解明しながら、サン=シモン主義の中に後に国民国家と呼ばれるようになったものへの志向があることを論じる。サン=シモンの構想する〈産業社会〉とは、人間生活の物質的基盤の生産および労働にかかわる狭義の経済のみならず、道徳・宗教・精神のようなモラルの領域や政治までを包摂した広義の「エコノミー」である。それは人間を伝統的な身分制秩序から解き放って〈産業者〉を構成する社会階級として再組織し、科学者・商工業者・芸術家などの各職能を発揮させる政治・経済体制にほかならない。今日のわれわれが国民国家と呼び習わしているのは、まさしくサン=シモンがヨーロッパ普遍的協同社会のモジュールと位置づけたこの体制である。

小 結

第1部を通じて、サン=シモンが〈産業社会〉の確立をポスト市民革命期の課題として追求した正統的な近代政治思想家であることが明らかになった。次に第II部では、サン=シモン主義が現実の国民国家建設に実践的に適用されていった過程をたどる。

第II部 第二帝政とサン=シモン主義

第4章 サン=シモン教からサン=シモン主義へ

サン=シモンの弟子達がフランス第二帝政を舞台に〈産業社会〉を実現していった過程を歴史的に叙述する。初期のサン=シモン主義運動を牽引したアンファンタンはサン=シモンの思想から主として道徳および宗教的側面を、またシュヴァリエおよびペレール兄弟は経済学的側面をそれぞれ継承し、政治的側面の体现者であるナポレオン3世が彼らを登用することにより、サン=シモン主義はフランス第二帝政の体制イデオロギーの地位を獲得した。第二帝政期のフランスは、思想が地上の統治者に庇護者を見いだし現実化される稀有な時代となったのである。それがナポレオン3世という紛れもない君主の後ろ盾があっただけで可能になったという事実も、フランスの近代化＝〈産業社会〉化にサン=シモン主義が

果たした役割の歴史的意義を減じるものではない。

第5章 サン=シモン主義者の人工庭園

「エピクロスの園」のイメージを手がかりとしながら、第二帝政期にサン=シモン主義者主導で実施された〈産業化〉政策の結果として国民国家が形成される過程を具体的に説明する。万人が生存に必要な資源を確保される〈産業社会〉の実現に向け、第二帝政下のサン=シモン主義者達はフランス金融界の近代的再編成、全国規模の鉄道網の整備、首都パリの大改造などの〈産業化〉を推進した。ナポレオン3世の肝煎で二度にわたり開催されたパリ万国博覧会ですらも、単なる文化的ページェントではなく、〈産業的動物〉を創造するために人間本性そのものを改造する装置であり、フランスにおける〈産業社会〉建設工程の最終段階に位置づけられるものであった。

第6章 第二帝政期における〈国民〉の誕生——ゾラの小説を中心に

サン=シモン主義運動により第二帝政期のフランス社会に劇的な変化が生じたことをエミール・ゾラの自然主義文学の分析から検証する。〈産業化〉政策の結果として人々の生活は確実に豊かで活気に満ちたものとなった。ゾラの小説に活写された庶民の生命力に溢れる活動は、〈産業化〉の恩恵である「物質的福祉」が人間と物質の^{コミュニケーション}交歓=交換を可能ならしめ、近代社会に伴う生の無意味化や疎外感を十分に贖いうるものですらあったことを示している。鉄道のもたらした均質な時間と空間が人間を伝統的共同体と身分制秩序から解放し、知覚経験のレベルから人間本性を作り変えたのである。ここに〈国民国家状況^{ナショナルリズム}〉が出現したことが確認できる。

結 論

サン=シモン主義とナショナリズムの関連が主題的に論じられにくいのは、サン=シモン主義の思想と実践が〈国民〉および国民国家をいわば意図せざる結果として創出したからである。サン=シモン主義は国民国家がその実現の過程で〈産業化〉を透過せざるをえないことを教えている。しかし〈国民〉の表象が、〈国民〉という実在を創造するというB・アンダーソンの「想像の共同体」テーゼに代表されるナショナリズムの観念的展開とは異なり、鉄道・都市空間・商品経済のような^{フイジカ}身体的=物理的な要件から期せずして〈国民〉が誕生する自然的な理路を体現するサン=シモン主義は、ナショナリズムの唯物的展開の可能性を示している。そこから導かれる最も重要な結論は、万人が〈産業者〉となって万人の生存のニ

ーズを満たす〈産業社会〉が、国民国家の名において「祖国のために死ぬ」ことを人々に要求するなどあり得ないということである。サン=シモン主義は国民国家の成立に決定的に重要な役割を果たしたのみならず、ポスト伝統・ポスト宗教・ポスト君主制の時代における〈国民〉のあり方をわれわれに向けて問いかけている。

氏 名 津村 夏央
学位の種類 博士（政治学）
報告番号 乙第50号
学位授与年月日 令和2年3月20日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当
学位論文題目 共和国から国民国家へーサン＝シモンおよびサン＝シモン主義研究ー
論文審査委員
（主査）教授 中金 聡
（副査）教授 安永 勲
（副査）教授 的射場 敬一

博士論文の審査結果の要旨

題 目 共和国から国民国家へーサン＝シモンおよびサン＝シモン主義研究ー

氏 名 津村 夏央

学位「博士(政治学)」論文 講評

津村 夏央「共和国から国民国家へ——サン=シモンおよびサン=シモン主義研究」

国士舘大学大学院政治学研究科は、同研究科博士課程を平成31年3月に単位取得退学した津村夏央より提出された上記の学位「博士(政治学)」請求論文を受理し、審査委員会を設置して同論文の審査にあたった。ここに講評を記すとともに、審査結果を報告する。

I 論文の構成

本論文は、A4版で本論202頁(総字数約170,500字)、参考文献表xiii頁、年表iv頁からなり、本論部分の構成は以下のようになっている。

序 論

1. 本研究の目的と研究史上の意義
2. 本研究の構成
3. サン=シモン小伝

第I部 サン=シモンの思想とそのコンテクスト

第1章 ナショナリズム論の現在

はじめに

1. 第1の座標軸——〈古代／近代〉
2. 第2の座標軸——〈自然／人工〉
3. 第3の座標軸——〈シヴィック／リベラル〉
4. 国民化と産業化

おわりに

第2章 ポスト市民革命期の政治思想

はじめに

1. 社会契約論の陥穽
2. テロルという反証
3. ユートピアと科学
4. 「百科全書」の精神

おわりに

第3章 サン=シモンの〈産業体制〉論

はじめに

1. フィジオクラシーの遺産
2. 実証主義と宗教のゆくえ

3. 〈産業社会〉とは何か

4. 体制転換の政治学

おわりに

小 結

第Ⅱ部 第二帝政とサン=シモン主義

第4章 サン=シモン教からサン=シモン主義へ

はじめに

1. 分光する思想

2. 「感情の科学」とその実践——アンファンタン

3. サン=シモン主義の経済学——シュヴァリエ

4. 「ナポレオンの観念」——ルイ=ナポレオン・ボナパルト

おわりに

第5章 サン=シモン主義者の人工庭園

はじめに

1. 物質の血脈——鉄道と銀行

2. 消費都市——パリ大改造

3. 物神の祭礼(1)——1855年パリ万国博覧会

4. 物神の祭礼(2)——1867年パリ万国博覧会

おわりに

第6章 第二帝政期における〈国民〉の誕生——ゾラの小説を中心に

はじめに

1. 「精神の空虚」をめぐって——ユイスマンスとゾラ

2. 『ルーゴン=マッカール叢書』の自然主義

3. 鉄道と時間の変容

4. 客車の経験——見知らぬ同乗者たちの世界

5. 〈産業化〉としての国民化

おわりに

結 論

Ⅱ 論文の概要

本論文は、19世紀の「ユートピア的社会主義者」サン=シモンの〈産業社会〉の思想と、その影響下にナポレオン三世の第二帝政で殖産興業を主導したサン=シモン主義者たちの活動が、フランスにおける国民国家の確立に決定的な役割を果たしたことを論証したものであり、サン=シモンの思想を歴史的コンテクストに関連づけて考察する前篇と、サン=シモン主義が現実の国民国家建設に実践的に適用されていく過程をたどる後篇の二部構成になっている。

第Ⅰ部 サン=シモンの思想とそのコンテクスト

サン=シモン主義の思想と実践を国民国家建設と関連づけるために、著者はまず、現代の

ナショナリズム言説に「国民」概念をめぐる(1)〈古代／近代〉、(2)〈自然／人工〉、(3)〈リベラル／シヴィック〉の3つの対立軸があることを指摘する。このうちサン=シモンおよびサン=シモン主義と直接に関わるのは、「国民」が近代国家を構成する自由で平等な人間として作り出され、その際に人々に一定の生活水準を保障するための産業化が不可欠であったとする(2)の人工論(E・ゲルナー、B・アンダーソン)であることが確認される。サン=シモンは、万人に自由で平等な権利を約束するフランス革命の「共和国」の理念に共鳴しながら、それが実際には上層ブルジョワジーの解放にとどまり、労働者および零細農民を困窮のうちに放置したことを憂慮した。そして彼ら巨大な人口をすべて「国民」として包摂し、かつ扶養することができる新社会の建設によってフランス革命を完遂することが時代の急務であると考えた。サン=シモンが「国民国家状況」という意味でのナショナリズムの歴史において再評価されるべき理由は、著者によればそこにある(第1章)。

困窮する大衆の救済は同時代の社会主義者バブーフやフーリエとサン=シモンとに共通する思想的課題であった。しかしマルクス=エンゲルスをも含む19世紀の社会主義思潮が国家を階級支配の道具として否定したのとは対照的に、サン=シモンは大衆の生活環境を改善するために国家が「上から」積極的な役割を果たすべきだと考え、17世紀の絶対王政下で誕生した集産主義的な統治の伝統を呼び起こしつつ、それを「百科全書」の実証科学精神により合理的に再編成することを企てた(第2章)。

サン=シモンの〈産業社会〉は、「生産の科学」に基づいて労働を組織化し、すべての人々が各々その職能を通じて社会の維持・発展に関与しつつ、当該社会の統治にもあたる〈産業者〉主体の社会体制として提示されている。だが筆者によれば、その実現はひとえに労働者大衆の精神的覚醒にかかっていたがゆえに、サン=シモンは後期著作で伝統的な身分制の徳に代わる労働と相互利益の倫理の説明に多くの紙幅を割いた。思想家サン=シモンには、ケネーのフィジオクラシー(重農主義政治経済学)の継承者という近代的な一面と「新キリスト教」の主唱者という旧弊な一面とが同居するといわれるが、後者は、当時の保守派の反動的宗教思想を牽制しつつ、革命後の道徳的真空状態を埋める「暫定道徳」(デカルト)として提起されたものと解釈される(第3章)。

以上から、著者はサン=シモンの〈産業社会〉が近代国民国家の理念に実質を与えるものであったと結論し、それをフランスに実現することが弟子のサン=シモン主義者たちに使命として課されたことを指摘して前半を締めくくる(小結)。

第Ⅱ部 第二帝政とサン=シモン主義

本論文後半の主題は、サン=シモンの没後に始まったサン=シモン主義運動とその政治的・経済的实践を通じて、フランスに国民国家が成立していく過程の説明である。

アンファンタン率いる正統派の精神主義運動が頓挫したのち、サン=シモン主義は殖産興業を主張する経済学者M・シュヴァリエや実業家ペレール兄弟らの経済派が主導するようになった。折しも獄中で読んだサン=シモンの著作に感銘を受けたルイ=ナポレオン(後のナポレオン三世)が第二共和制の大統領となり、彼らを政府要職に登用する。筆者によれば、この時期を扱ったマルクスの時事的な論説の多くには、権力者の庇護を得て体制イデオロギーとなったサン=シモン主義に対する嫉妬が垣間見える。第二帝政期のフランスは、思想が地上の統治者によって現実化される稀有な時代となったのである(第4章)。

第二帝政期は、サン=シモン主義の思想とナポレオン三世の権力とが手を結び、フランス

を〈産業社会〉へと変貌させるべくさらに大規模な改革が行われた。ペレール兄弟の株式投資銀行「クレディ・モビリエ」を中心としてフランス金融界は近代的に再編成され、政府の意向に従って優先的に融資を受けた産業が飛躍的に成長した。その代表が鉄道であり、第二帝政末までに全国的な鉄道網が敷設され、フランスは隣接する地中海沿岸諸国と接続されていった。生産力の増大にともない、首都パリは「消費都市」として大改造（いわゆる「オスマン化」）を受け、「19世紀の首都」の様相を呈した。これらの施策が〈産業社会〉先進国イギリスと経済覇権を争うナポレオン三世の意向の反映であっただけでないことは、パリで二度にわたり開催された万国博覧会に明らかであった。企画責任者のシュヴァリエとル・プレーは、押し寄せる来場者に來るべきヨーロッパ大の〈産業体制〉を体感させ、またその到来を待望させる巨大な啓蒙装置として万博を構想していた（第5章）。

サン=シモン主義の実践によりフランスに実現した〈産業社会〉の実相を、第二帝政期の庶民生活を描いたゾラの自然主義小説で確認することが最終章の主題である。人々は物質的に豊かになっただけでなく、特に鉄道を通じて形成された均質で客観的な時間と空間の中で生活することにより、それまでの身分制社会に伴う「アウラ」（W・ベンヤミン）から解放された。それはまた、産業化政策のもたらした物質的福祉が、革命後の政治的・経済的混乱に倦み疲れた人々の精神的荒廃を贖い、近代社会に伴う生の無意味化や疎外感をさえ十分に補いうるものであったことを示している。著者によれば、この〈産業社会〉の経験こそが続く第三共和制下で人々が国民生活を謳歌する土台となったのである（第6章）。

以上の考察から、著者はサン=シモンの思想とその実践が近代国民国家形成史に決定的な役割を果たしたと結論する。そして、「国民」の観念が人々の心に植え付けられることにより国民が誕生するという「想像の共同体」論の観念性を批判し、産業化を通じて生活の物質的基盤が整備され、人々が実際に共通の国民的経験をするようになってはじめて「国民国家状況」が成立すると考える「唯物論的ナショナリズム」を主張して、本論文を終える（結論）。

Ⅲ 論文の特色と評価

サン=シモン研究は、マルクス主義陣営により「ユートピア的社会主義」の烙印を押されて以来、日本ではもちろん、祖国フランスでさえさしたる進展を示していないといえる。この分野での古典といふべきS・シャルレティ『サン=シモン主義の歴史——1825-1864』（1931年）は、マルクス主義のオルタナティヴとしてサン=シモン主義の倫理性を強調することにより、かえって「ユートピア的社会主義」というレッテルを正当化する結果になっている。また英語圏にはF・マニュエルの記念碑的モノグラフ『サン=シモンの新世界』（1956年）があり、政治思想史で唯一サン=シモンに一章を割いて論じたS・S・ウォリン『政治とヴィジョン』（1960年）があるとはいえ、どちらも「ユートピア的社会主義」という本質規定を外してはいない。

この点で本論文の第一の特色は、定説に果敢に挑戦し、サン=シモンの思想をナショナリズムとの関連で読み直すという独創的な視点を提起したことにあるといえる。一次資料となる思想家のテキスト（サン=シモン伝語著作集および邦訳）を丹念に読み解く本論文の方

法は、思想研究としてオーソドックスだが、テキストに特殊な解読を施すだけが独創的な解釈ではない。同じテキストが新たな光のもとにあらわれてくるような別のコンテクストを発見する研究も、十分に独創的な解釈となりうるだろう。そのかぎりでは本論文は、少なくともサン=シモン研究にきわめて独創的かつ斬新な問題提起をした点を評価されるべきだといえる。

第二の特色としては、サン=シモンの思想とサン=シモン主義者たちの行動の密接不可分な関係を明らかにした点を挙げることができる。経済学者シュヴァリエについてはフランスの経営史研究や金融史研究で、またナポレオン三世についても伝記的研究で、それぞれ内外にかなりの蓄積があるが、彼らがサン=シモンと直接間接の師弟関係にあったことは指摘しても、その影響が具体的に彼らの思想や行動のどこにあらわれているかを詳細に論じたものはなかった。日本では上野喬の『シュヴァリエ研究』と鹿島茂の一連の著作が、シュヴァリエとナポレオン三世の産業主義政策によりフランスに国民国家が成立したことを明らかにしてきたが、サン=シモンの思想との関連については断片的な説明しか与えられていない。この点で本論文は、思想史と社会史を繋ぐ日本では数少ない研究として高く評価することができる。

第三の特色としては、本論文がサン=シモン研究のみならず広くナショナリズム研究にもたらすインパクトが挙げられる。現在のナショナリズム研究を活気付けたアンダーソンの「想像の共同体」論は、西欧起源の「国民」観念が非西欧諸国でいかに機能したかの説明にはなっても、そもそも「国民」が西欧でいかにして誕生したかは不問にしている。本論文は、産業化によって鉄道をはじめとする近代的なインフラが整備されたこと、がいわば「意図せざる結果」として「国民」を生み出した（それを著者は結論で「唯物論的ナショナリズム」と名付けている）ことをサン=シモン主義研究の形で明らかにしたともいえる。審査の過程でも、フランスで産業革命を経て第三共和制期に国民国家の確立を見たことは、少なくともサン=シモンの思想とサン=シモン主義者たちの組織的な活動なしには理解できないとする本論文の主張は同意を得た。

他方、これらの評価されるべき特色のなかに本論文の欠点も瞥見される。筆者のさらなる研鑽を期して、特に本論文の主題を論証するやりかたに関して審査過程で修正を指示された諸点を以下に記録しておきたい。

第一に、フランス革命の暴力を「呪詛」しつつ「その理念を否定するには至らなかった」と著者のいうサン=シモンのアンビヴァレンスについての説明が不十分なため、サン=シモンが「革命の子」であるという意味が伝わりにくいことである。フランス革命は絶対王政から民衆へと権力を移行させる政治革命であったとともに、王政を正当化していた聖職者と貴族の徳（敬虔および名誉）から「第三身分」と「第四身分」に共通する労働および相互利益の倫理へと社会的価値が転換した革命でもあった。この転換を正当化し、〈産業社会〉の到来を予言したのがサン=シモンという思想家であることをあらかじめ明確にした上で、サン=シモンの革命批判とその当否を論じるほうが、論旨がより明確になる。

第二に、著者はサン=シモンの思想をナショナリズムの文脈で解釈しようとして、「ユートピア的社会主義」というマルクス主義的な理解を否定するのに性急でありすぎる。サン=シモンの〈産業社会〉論をなんの説明もなく「現代福祉国家の先取り」「現代型自由主義の先駆」と断定するなど、やや不用意な表現が多いのもそれと関係していると考えられる。サン=シモン主義を仮に一種の「社会主義」と理解しても、それが後年の国民国家論の礎と

なつたと解釈することは十分に可能であり、むしろそのほうがサン=シモンの思想の特異性を説得的に証明することになるだろう。

第三に、著者がサン=シモン自身の主張に囚われすぎ、些末な点に振り回された結果、論文全体の流れを見失って脱線気味になる箇所が多いことである。たとえば「集産主義」や「フィジオクラシー」はサン=シモンの思想の理解には確かに不可欠なのだろうが、本論文の主題からすれば副次的な意味しかない。著者自身の解釈の論証に傾注し、それに必要でない要素は大胆に切り詰めて叙述するべきであった。またそのためにも、サン=シモン自身の言い分を鵜呑みにするのではなく、19世紀初頭当時のヨーロッパの政治経済情勢に広く目配りしながら、適宜その正否を判断することが必要である。

その他として以下の点が挙げられる。第3章で多用される「エコノミー」概念のフランスに特有の含意が未消化なため誤解を招きやすい。またシュヴァリエの思想を論じた第4章第3節は、一次資料が入手しにくいという事情はあれ、上野喬氏の先行研究に寄りかかりすぎており、少なくとも引用出所について氏の研究の恩恵に与っている旨を明記すべきである。

IV 結 論

本論文は、サン=シモン研究史上きわめて斬新で独創的な解釈を提示し、その問題提起と発展可能性によって当該研究領域に貢献するものと予想される。主題の論証面での物足りなさおよび表現の不備は多々あるものの、審査過程での加筆・修正により博士論文としての最低限の体裁は整えられ、本論文の価値を大きく毀損することはないと判断する。以上の理由により、本論文を「博士(政治学)」の学位を授与するに値するものと認める。

令和2年2月26日

審査員

主査	国土舘大学政経学部教授・ 国土舘大学大学院政治学研究科教授	中 金 聡
	国土舘大学政経学部教授・ 国土舘大学大学院政治学研究科教授	的射場 敬一
	国土舘大学政経学部准教授・ 国土舘大学大学院政治学研究科准教授	安 永 勲